

## ラフカディオ・ハーンと夏目漱石の幻想作品における母のイメージをめぐる比較研究 —記憶の再構築について—

秦 裕緯

### はじめに

近代作家ラフカディオ・ハーンと夏目漱石の幼少時代は複数の先行論に注目されている。ハーンは四歳の時、両親が離婚し、母親と永別することとなった。一方、漱石は望まれない子として、生まれてすぐに里子に出された。養父母の離婚により、9歳のとき生家に戻るが、21歳まで夏目家への復籍が許されなかったのである。幼少時代の経験は、両作家の精神が不安定になった背景であると考えられている。また、両作家の幼少時代の母親に対する記憶も、その後の作品に影響を与えたと認識される。ハーン作品の主題の一つと考えられる永遠の女性像には、母に対する感情が含まれているとの指摘もある。また、ハーン作品に複数登場する「鳥」のメタファーは、ハーンの出身地で、母ローザと共に暮らしたレフカダ島に関係があると考えられる。漱石の諸作に登場する女性人物、またはその初期の自然観に対する解釈では、「母を求める気持ちが無意識に働いている」<sup>1</sup>と論じられる。このように、母親に関する思い出がハーンと漱石の創作に大きな影響を与えたが、二人の作家の作品を見ると、生母と共に過ごす日常生活を直接的に描いた写実的な作品は多いとは言えない。「母親」は常に遠い記憶の中、或いは幻想的で朦朧たるイメージとして両作家の作品の深層に潜んでいる。ハーンと漱石の短編幻想作品「MDCCCL III」と「夢十夜」の二作において、この共通性が示されている。本稿では、二作品を中心に、両作家の幻想作品における母のイメージを比較し、作品に描かれた母に関する記憶と現実の相違点とその原因を解明したい。

### 1. ハーンと漱石の幻想作品における記憶の再構築

「MDCCCL III」の舞台は二つに分けられる。それは、冒頭部分の町と後半部分の病棟である。町は「重苦しい暑さ」に苦しめられ、顔が「炎のように黄いろ」の死者が毎日現われる<sup>2</sup>。これらの描写で熱病に蝕まれる熱帯町のイメージを描き出した。この作品を創作したのは、ハーンがニューオーリンズに在住していた時期である。ハーンは来日する前、ニューオーリンズで10年近く過ごしている。そのニューオーリンズ滞在の間、デング熱（骨痛熱）にかかって体が衰弱し、視力がひどく衰え、更に、デング熱が再発するもレモン汁を使った荒い治療で克服したといわれる<sup>3</sup>。この経験により、熱帯の風土病に関心を持つようになり、ニューオーリンズに在住する間、「黄熱病」(1881)「丸薬入れ」(1881)「MDCCCL III」(1882)など、熱病に関わる複数の短編作品を著した。これらの作品は、熱病の要素だけではなく、叙述手法及び内部構造においても共通点が見られ、幻想的で抽象性の強い作品がほとんどである。以上、ハーンを経験を基に分析すると、「MDCCCL III」の冒頭に登場する暑さと病に苦しめられる熱帯の町は、作家の実感する「現在」であると認識できる。

「現在」に対立する時間は、題目「MDCCCL III」のローマ字がグレゴリオ暦で表示する数字、すなわち1853である。1853年はハーンがまだ4歳で、その父チャールズが黄熱病にかかり、本国に送還

された年であった。帰還直後に母ローザと烈しく衝突したと言われている。ハーン母子はその後ダブリンに移住したが、母ローザは、風土と言語には慣れることができず、精神的に不安定になる。時に自傷行為をし、暗く沈むことが多く、子供に当たったという記録もある<sup>4</sup>。1853年は、幼いハーンが両親を通じて、肉体的精神的な病の苦しみを知り始めた年といっても過言ではない。また、当時在住していたダブリンも、ハーンに辛い思い出を残した。牧野（1988）<sup>5</sup>によると、幼児期の大半を過ごしたダブリンについて、ハーンは「終生めったに具体的な形で語ろうとはしなかった」のである。このことから、ハーンはダブリン当時の思い出を否定し、恐れていると言えよう。その原因に、アイルランドの雨や曇りの多い気候、子供の時に聞かされた恐ろしい民話と両親に見捨てられた孤独と不安などがあると言われる。ハーンがダブリンでの幼児期に触れる時、「夢魔の感触」「薄明の認識」などの描写がなされるとも指摘される。

「MDCCCL III」の中には、ニューオーリンズやダブリンなど具体的な地名は一度も登場していない。しかし、熱病の多い熱帯町及び暗く陰気な病棟という二つの描写と作品の題目に提示された時間に合わせてみると、その二つのシーンの切り替えは、1882年のニューオーリンズと1853年のダブリンの切り替え、いわば作家の現在と過去の切り替えであった可能性が高い。主人公は突然病棟の中に入れられ、「鉄の大門」によって現在と隔てられる。病棟では、暗闇、何百の死の部屋など、恐ろしい事象が次々と現れる。鐘の音が鳴ると、誰かに死が訪れるという悪夢のような景色も描かれている。恐ろしい病棟において、主人公と手をつなぎ、導いてくれたのは、“her hand was cool and light as mist – as frost”（霜のように冷たくて、霜のように今にも消え入りそう）な手をした“Sister”（看護婦）であった。「看護婦」の外見については、“a dark and beautiful face with very black eyes”（黒い眼をした黒い顔は美しかった）という描写がある。「看護婦」は主人公を最後まで導き、そしてその傍から離れた。「看護婦」の死については、“some one told me, only a few days later”（数日後に、私は誰かから聞いた）と記述している。

「MDCCCL III」の冒頭には、“somebody I knew was there—a woman”（ある人がそこにいることを、私は知っていた——女の人だった）という、過去の記憶に関する独白があり、作品における「女」の重要性もこの叙述によって示されている。ハーンは後年、4歳の時の母ローザに対する回想の中で、「その時、私ママさんの顔をよく見ました。髪の毛の黒い、大きな黒い眼でした」と述べたことがある。また、母ローザが南国女性特有の浅黒い肌をした美しい女性であったことを談話及び書簡の中で複数言及しており、それは作中の「看護婦」のイメージに重なっている。ハーン作品に一貫した重要な主題に、来日前後を問わず、母への思慕、また、母に愛されているという確信が存在する。母ローザに対する朦朧たる記憶を「看護婦」のイメージで再現したが、彼女は恐ろしい暗闇の中で主人公を導いてくれることから、唯一の美と心の慰めをもたらす存在と言っても過言ではない。しかし、「MDCCCL III」では、何故母のイメージを曖昧にし、「看護婦」という分身を借りて登場させたのだろうか。この点は疑問に残る。

漱石の短編幻想作品「夢十夜」「第九夜」にも、「MDCCCL III」と同様に、「母」のイメージが見られる。「第九夜」の背景は戦乱時代で、子供連れの母が遠いところに行った父のために毎晩八幡宮へ行き、御百度を踏むことによって父の平安を祈る。しかし、語り手によると、父は「とくの昔に浪士のために殺されていたのである」。母が子供を連れて御百度を踏むシーンは作品の中で詳しく描かれている。母の御百度は「夜になって、四隣が静まる」ときに、「森として静かである」家から、銀

杏の右、田圃と熊笹を通り過ぎて鳥居まで行き、「暗い杉の木立」を潜り抜けてやっと現れる古い拝殿で行く。子供は「鈴の音で眼を覚まして、四辺を見ると真暗なものだから、急に背中で泣き出す」ことがよくあり、母は子供を慰めるために祈りを何度も中止することとなる。『夢十夜』の冒頭は、複数使われた「こんな夢を見た」で始まり、一人称視点で叙述するのではなく、語り手をメタポジションに位置付けている。生方(2009)<sup>6</sup>の論によると、「第九夜」では、語り手により、御百度を踏む母とそれを待つ子、物語の語り手である子とその母という、二組の母子に分けられている。物語内の母子の視角を用いて視覚的な描写を行い、物語の超越的な語り手の位置から父の死、遠方の戦乱など不可視なものを声によって体験させる。よって、「第九夜」の語り手は「不在として存在するもの」であると認識される。

作品の結末では、「こんな悲しい話を、夢の中で母から聞いた」という記述がある。「夢の中で母から聞いた」は「こんな夢を見た」と共に語り手についての説明であるが、両者に大きな違いがある。それは、「夢の中で母から聞いた」という表現を通して、母と子が二人きりで、子供が母から何かを聞くシーンが二回現れ、「第九夜」の中で類似する二重の夢を内包する構造が示される。また、語り手は夢の中で母から話を聞いた子供でありながら、他の九夜と共に成人のしゃべり方で「夢」を語る。「夢十夜」各章の語り手は、作家の代弁者或いは作家の一部の感情を投影したものと一般的に認識されている。故に、二重の夢の中で現れた母と子のシーンは、作家の子供時代の記憶につながると推測できる。語り手の「子供」と同じように、夢の中で母から話を聞いた記憶が、漱石最後の随筆集『硝子戸の中』<sup>7</sup>において、母千枝に関する重要な思い出として記述されている。『硝子戸の中』三十八章には、昼寝中に悪夢に襲われ、母親に慰めてもらった子供時代の記憶が、「全部夢なのか、または半分だけ本当なのか、今でも疑っている」という記述がある。漱石の無意識の世界を反映したと言われる『夢十夜』と最後の随筆である『硝子戸の中』の関連性を論じる先行研究は数多く存在している。原田(2018)<sup>8</sup>は、『硝子戸の中』三十八章に登場する、悪夢から救うため「いくらでも御金を出して上げる」と慰めてくれる母が、『夢十夜』「第八夜」で札を勘定する女の原型だと主張する。その論拠として次の二点を挙げている。一つ目は、「第八夜」の勘定する女への関心によって反映された漱石の経済的な自信が、思い出の中母からの慰めに合致する点である。二つ目は、勘定する女の髪型が銀杏返しであり、漱石の好きな母千枝の髪型と同じであったという点である。原田氏の論で指摘したように、『硝子戸の中』で現れる母に関する要素は「第九夜」にも複数見られる。例えば、『硝子戸の中』三十七章と三十八章において、「生死事大無常迅速云々と書いた石摺」が母と共に作家の記憶の中で二回登場する。そして、「第九夜」では、死んだ父のために御百度をする「母」が真実を知らずに無意味な行為を繰り返し、死生の無常に翻弄されている。一方、物語を語る「母」は全知全能であり、見えないところにある「父」の死のメッセージを語り手の子供に伝えようとする。「第九夜」において、子供が「眼を覚まして、四辺を見ると真暗なものだから、急に背中で泣き出す」時、母から慰めてもらう物語は、幼い漱石が悪夢に襲われ、「気の狭い私は寝ながら大変苦しみ出した。そうしてしまい大きな声をあげて下にいる母を呼ん」で、慰めてもらう記憶に重なる。更に、「第九夜」において、母子二人をつなぐ「細帯」も、『硝子戸の中』三十七章と三十八章で二回言及された母千枝の「狭い黒縋子帯」のイメージを想起させる。

「第九夜」では、母千枝の思い出の中に残る現実的な要素を基に、再構成された夢を描いている。『硝子戸の中』で述べる「全部夢なのか、または半分だけ本当なのか、今でも疑っている」という母

に対する曖昧な記憶は、「不在として存在する」語り手により、更に信憑性が低くなり、現実性が失われ、複層の夢の奥にある幻想的な時間となっている。「MDCCCL III」では、1853年という過去に実在する時が使われたが、作中に登場する病棟は、両親の病気に関する記憶やダブリンに対する「妖魔の感触」「薄明の認識」という印象から生じた1853年のトラウマによって虚構されたものと認識するのが適切であろう。両作品の内容はいずれも作家にとって思い入れが強く、その記憶の中に存在している時間を基に描いているが、その時間が意図的に歪められ、現実と遠ざかるように変形している。この変形は、記憶の核心である母のイメージが変形していることから認識できる。「MDCCCL III」では、「看護婦」を借りて母のイメージを再現する。「第九夜」では、母と称される人物が夢の分層により二人存在している。これらの変形が、作中の母と作家自身の記憶する現実の母、その両者の母の距離感をより拡大させる。両作家には、記憶中の要素を作品に導入し、現実との関連性を提示する一方、曖昧な時間表現と変形された母のイメージによって、母に関する思い出を現実から剥離しようとする傾向がある。母に対する記憶から描かれた二作品に宿る類似した矛盾性は、ハーンと漱石の幼少期体験から創作への影響に基づいて解明できると考えている。

## 2. ハーンと漱石の幼時体験と創作の関連性について

ハーンの作品では、晩年の再話作品『骨董』『怪談』が広く知られており、集大成とも言われる。日本各地に伝わる伝説や古い怪談集などにより再話されるこの二作からは、ハーンの怪奇趣味が一部見られる。ハーンが異常なものや怪奇な世界に心を寄せる要因としては、その幼少期の経験に遡ることができる一般的な認識されている。牧野（1991）<sup>9</sup>は、「ハーンのアメリカ時代に書いた新聞記事の犯罪描写の克明さには何か異様なものが漂い、またシンシナーティ、ニューオーリンズや西インド諸島でも土地の幽霊話に興味を示して記録している。そしてハーンの残した何枚かのスケッチや水彩画からは、精神分析でいう無意識の世界に通じるような何か強烈な不安感が漂ってくる」と、その幼年期の精神創傷と創作のつながりを指摘する。高瀬（2007）<sup>10</sup>は、「天涯孤独なハーンにとって、かつて恐怖の対象であった亡霊や幽霊こそが唯一最も親愛なる存在となったのである」と述べ、幼少期からの精神的な孤独により、ハーンの意識下で異界と現実世界の境界線が曖昧になったことを論じている。

漱石の精神状態に対して、塚本（1994）<sup>11</sup>は病跡学的研究を要約し、精神分裂説、うつ病説、混合精神病説、パラノイアまたは敏感関係妄想説、境界例説と正常説の六つに分類する。高橋（2009）<sup>12</sup>は漱石の文明批評に対し、「極めて内面的、個人的な色彩の濃いもの」と述べ、精神衰弱や妄想体験などの「精神病」体験が、その前期と後期作品に一貫して見られ、作品の一つの中核になっていると論じる。

また、漱石の幼少期からの影響も数多く論じられている。松岡（2012）<sup>13</sup>は、漱石の家庭愛が稀薄な幼少期体験は、作家「存在の根拠」の喪失を導くと分析する。幼少期親に否定された過酷な経験は、漱石の一種のトラウマとなり、成人後の不安や孤独など精神問題の内因の一つになったと複数の研究者に指摘される。これらの先行研究を見ると、漱石には、本人の病的な精神状態を作中人物に投影し、その創作過程で、自ら病因を探求する一面があるとの認識で共通している。

福島（1982）<sup>14</sup>は、漱石は幼少期に養子に出されて生父母と養父母の間を転々とする体験をしたこと

で、漱石が「人生最初期における基本的信頼感の形成が損なわれ」と指摘し、これが後年の精神障害に至る要因の一つであると論じる。千谷氏は漱石の憂鬱症を論じる時、根源の一つとして「不安」の存在を重要視し、「居場所のない不安」という概念を提出した。「居場所のない不安」とは、「自分が居る」という実感の欠如によって引き起こされる不安と言われる。一方、ハーンは、「希臘イオニア列島の一つである地中海の一孤島に生れ、愛蘭土で育ち、佛蘭西に遊び米國に渡つて職を求め、西印度に巡遊し、遂に極東の日本に漂泊」「永遠に故郷を持たない浦島太郎」「世界の國々を漂泊して、遂に心の郷愁を慰められなかつた旅人」<sup>15</sup>などと言われる。「南方憧憬」<sup>16</sup>を含む原初へ回帰する意欲もハーン文学の重要な主題の一つであり、複数の作品で見られる。千谷氏が指摘した漱石の「居場所のない不安」と共通点があると考えられる。

ハーンが母ローザと共に過ごしたのは3年だけで、その後会うことはなかった。漱石が母と共に暮らしたのも、わずか5年未満であった。漱石が15歳の冬、千枝は亡くなった。二人の作家に共通する不安定な生活と母喪失という幼少期の経験が、精神的な「不安」と「欠如」を形成した要因の一つだと考えられる。「不安」を抑えるため、両作家は同じく幻想的な時間の中で記憶の中の母のイメージを美化したのではないだろうか。

### 3. 「不安」と「欠如」による記憶美化

第一節の分析により、「MDCCCL III」の題目で表示された1853は、ハーンが1853年に対する思い出の破片に基づいて再構築した幻想的な時間であることが推測できる。この幻想的な時間の核心として登場した「看護婦」は、ハーン之母ローザに似た「黒い眼をした黒い顔」の美しい女性であり、ハーン4歳時の母の外見に対する記憶と重なる。「看護婦」が最後まで主人公の手を握り、暗い病棟の中で優しく慰めるという描写がある。牧野(2011)<sup>17</sup>はハーンの長編小説『ユーマ』(Youma, the Story of a West-Indian Slave, 1890)<sup>18</sup>に登場する「聖母」ユーマとハーン之母ローザを比較した。その一部を抜粋すると、「ローザは、幼いハーンを一人ダブリンに残して、祖国に帰ってしまった。ローザには、ハーンを守りぬく強さも、またアイルランドの異文化に耐え、自分の中にとりこんでしまう強さもなかったといえる。それゆえ、ここに見られる母の面影とは、実際のハーンには与えられなかったゆえに、ハーンが心の底から欲しただろう「母」の存在、いわば理想化された「母なるもの」の姿というべきかと思われる」と論じている。「MDCCCL III」の「看護婦」については、死ぬことで一度離れるが、再び夢の中で迎えに来るという極端な表現を用いて、子供を絶対に見捨てないという母のイメージを描き出している。これは、「聖母」ユーマのイメージと類似している。ハーン母子の永訣は1853年の翌年であった。そして、「MDCCCL III」においても、主人公は「看護婦」と死別することになる。ただし、その主人公が看護婦と別れる直前に複雑な情緒を込めて最後に見入るといふ場面がある。それは現実の1853年に存在しないはずの決別シーンである。このシーンが挿入されていることで、「MDCCCL III」は1853年に対する記憶を写實的に記録したものではなく、1853年の母ローザの病気に関する記憶に基づき、ハーン幼少期の一連のトラウマによって再構築された幻想的な時間であることが明確になる。また、作中において、“the influence of that last look, perhaps still vibrating, like an expiring sunbeam, a dying tone” (彼女が最後に見せたあの目ざしから感じたものが、消えていく落日の余光のように、余韻を震わせていた) “something in her eyes had

rekindled into life something long burned out within my heart— the ashes of a faith entombed as in a sepulchral urn” (とうの昔に葬られた「まごころ」の灰殻に、もういちど火をつけてくれた) “it was only a dead emotion, warmed to resurrection by the sunshine of a woman's eyes” (彼女の目ざしで温められて蘇った昔の感情) など死別前に看護婦に見入る時の描写は、現実の母との永訣では果たさせなかった可能性があり、上述「1853」の描写から、母のイメージに対する理想化と美化が垣間見られる。

「第九夜」の母子は、「森として静かである」家に住み、深夜に八幡宮で御百度をする。それはまるで戦乱から隔絶された二人だけの暗く静かな世界の世界である。子供はどれほど御百度の邪魔になっても、母は子供を一人にすることなく、慰めを与える。一方、父のことを心配で仕方がない母にとって、子供との会話が唯一の慰めとなる。母と子供の会話が簡単な言葉を繰り返す無意味なものであることと同様に、既に死んだ父のために御百度を繰り返すことも無駄な行為である。闇の中でこれらの無意味な行為を繰り返す母子にとっては、互いの存在が唯一の慰めとなる。この「第九夜」で描かれた母子関係も、幼い漱石の経験した母子関係とは大きなずれがある。漱石は、期待されない末っ子として生まれ、9歳までほぼ生母千枝と共に過ごしたことがない。それゆえか、母に愛され、重視されたいという意欲が不安を引き出し、その不安を抑えるため、一瞬の朦朧たる過去の記憶を現実と遠く離れた夢のなかで延々と続くようにし、母子だけの時間、また、母子間の絆を求める姿勢がみられる。

北垣氏は漱石文学における「不思議さや、強い偏向」の根源を追究する際に、「幼児の心的発達の様相」をその要因の一つとして挙げ、「彼が幸福と安慰を感じるのは、結局幼児的親近感にほかならない」と論じる。ハーンと漱石は共に子供時代から精神的に敏感であったと言われる。記憶自体が曖昧になりながらも絶えずに伝わってくる幼少期の精神的な不安を抑えるために、記憶自体を抽象化、美化し、幻想的な時間を再構築することによって、記憶から生ずる精神的な傷を修復するという試みが両者から見られる。

#### 4. 幻想性の追求

ハーンと漱石はともに神秘性を求め、怪奇趣味のある作家だと認識されている。ハーンは母ローザとギリシアのレフカダ島で3年間暮らし、その後ダブリンに移住することとなったが、雨と曇りの天候が続く慣れない土地で母を永遠に失ったのである。「MDCCCL III」において、「看護婦」は手が「霜のように冷たくて、霜のように今にも消え入りそう」という描写があり、死んだ女の突然現れたシーンで「看護婦」の姿が暗闇の中で見えなくなるというプロットがある。これらが、「看護婦」の存在と死の要素に強い繋がりを持たせている。しかし、ハーン来日後の再話作品と同様に、「死女」である「看護婦」のイメージにマイナスの要素はなく、死と伴って現れる女神のような存在である。更に、永訣する前の「看護婦」の目ざしは、主人公の感情を復活させる。作品の結末で、主人公も死に向かうようになるが、それは現実のような熱病による悲惨な死ではなく、“strange dreams” (不思議な夢)、“I fancy that I might hear again the whisper…” (彼女と再会できる喜び)、“with the sweet questioning - ‘Come! You are not afraid?’” (彼女からの優しい慰め)を合わせた回帰に近い「死」である。高瀬氏は、ハーンの「かつて恐怖の対象であった亡霊や幽霊」が、最終的に「唯一最も親愛なる存在となったのである」と論じ、ハーン作品における幻想性、神秘性、怪奇趣味形成の必

然性を指摘している。1853年はハーンにとって、子供時代さらには人生の転換点といっても過言ではない。そして、母のやさしさと「亡霊や幽霊」の怪奇性が混在する「看護婦」のイメージは、ハーン後日作品において、死生を越えた「永遠の女性」の起点になったと言えるだろう。

原田氏の論には、漱石の「現実的な愛の関係は遠のいて、その後も、漱石文学の主人公たちが、愛そうとした「マドンナ」たちは、常に「死」の影を伴いながら、漱石文学の深層に君臨し続ける」とある。母は幼い漱石にとって実に神秘的で、「ほんやり霞んで見えるよりほかに仕方がない」存在であった。共に過ごした時間も短く、「記憶の断片」しか残っていない。そして、漱石の母に対する印象は、「何にも云わないけれども、どこかに怖いところがある」、「畏敬の念を抱いていた」というものである。母は漱石がまだ13・4の時に亡くなったため、彼の中で永遠の謎となったのだろう。夢の中で「死」のメッセージを伝え、「生死事大無常迅速」の石摺とともに登場する設定も、母のイメージが死につながることを示している。母は漱石にとってほぼ空白であり、謎めいた存在である。距離感を感じさせる母が悪夢から救ってくれるという夢、即ち、親しい関係の母子関係を示す夢のような記憶も、現実と夢の狭間で謎となり、「死」の影を伴いながら漱石の母のイメージの一部となる。

北垣氏は、漱石の中にある「幽霊のような女（死の女神）」への憧れは、現実の養母への憎悪と軽侮、生母への遥かな思慕と共に形成されたイメージであると論じる。ハーンは幼少時代に母ローザと永訣したが、漱石も生母千枝と共に過ごした時間が短い。また、その短い時間の中でも、余り幸福とは言えない記憶も存在する。しかし、両作家の作品からは、母に対する思慕が生涯続いていることが読み取れ、マイナスなイメージは一切ない。一部の体験を忘れたい、思い出したくないという思考や記憶回避は、記憶知覚的補完の脳内メカニズムが働いていると一般的に認識される。そして、「MDCCCL III」における「母」との再会、「第九夜」における母と二人きりの時間などのプロットからは、記憶に対する補完と美化が見られる。両作家は、作品を通して現実の母を象徴的な母のイメージへ接近させているが、これも両作家が幻想的な世界に心を寄せる要因の一つだと推測できる。中山氏は、漱石が「母とのえにしのはかなさを、あの夢のエピソードが象徴的にものがたっている」と論じる。ハーン作品に頻繁に現れる島のイメージも、母ローザと過ごした時間を象徴するものと先行研究で複数指摘されている。母に関する記憶は両作家の創作の一つの原点である。そして、母のイメージが含む幻想性と「死」との関連性も両作家の諸作品における女性像に共通している。

## おわりに

本文は、ラフカディオ・ハーンの「MDCCCL III」と夏目漱石の「夢十夜」という二つの幻想的な短編作品を分析対象として比較を展開した。両作品は同様に、過去の記憶に基づいて再構築された時間を背景として、記憶の中の母のイメージを登場させる。母に関する記憶が両作家の作品において、母のイメージによって複数現れ、美化された特徴を共有している。また、幼少期の記憶が再構築されたのは、両作家の作品における記憶の美化及び幻想性を求める傾向と深いつながりを持っているためである。「MDCCCL III」と「夢十夜」「第九夜」は、記憶における時間を幻想的に再現し、母のイメージを重んじるなど特徴が共通性を示している。「MDCCCL III」では、主人公は現実の時間と「1853」の時間の間で往復する。「第九夜」の語り手はメタポジションでありながら、夢の中の子供との関連性が深い。現実と夢の両方で存在するとも言える。即ち、両作品中の時間の幻想性は、現実の

時間から生み出し、現実の時間と一体化するものである。日常的な時間から非日常的な要素を引き出すという考え方は、両作家の複数の幻想的な作品で共通している。

ハーンと漱石の作品では、美と非現実性という特徴を持つ女性像が複数現れている。両作家の記憶が再構築された産物である母のイメージは、その創作の中での女性像の確立に対して、重要な意義を持つことが考えられる。現実的な女性の一部の特徴を保留しつつ、幻想性を強化するという描写も見られる。現実の特徴と幻想性という二つの角度から描かれたものが、作品における幻想と現実の接点となる可能性を示した。今後の課題として、両作家作品における現実的な要素と幻想性の相互関係、また、女性像が両作家の作品における重要性について追究したい。

- 1 中山和子 (1971) 「漱石 - 初期における自然の意味」『文芸研究』26号、pp.61～77.
- 2 「黄熱(yellow fever)」の「黄(yellow)」については、黄疸で患者が黄色くなることに由来する。
- 3 斎藤正二 / 他 (訳) 『ラフカディオ・ハーン 著作集第十五巻 書簡Ⅱ・Ⅲ / 拾遺 / 年譜』恒文社、1988
- 4 同上
- 5 牧野陽子 (1988) 「ラフカディオ・ハーン『茶碗の中』について」成城大学経済研究、pp.131～153
- 6 生方智子 (2009) 「反 - 増殖の論理としての < 持続 > : 夏目漱石『夢十夜』」(前編) 『立正大学文学部論叢』(129)、pp.83～97.
- 7 『硝子戸の中』は漱石最後の随筆であり、1915年1月13日から2月23日の間『朝日新聞』に掲載された作品である。
- 8 原田広美 『漱石の夢とトラウマ母に愛された家なき子』新曜社、2018
- 9 牧野陽子 (1991) 「ラフカディオ・ハーン：晩年の結実 (一)」『成城大学経済研究』(113)、pp. 1～22
- 10 高瀬彰典 (2007) 「小泉八雲の異文化理解」『島根大学教育学部紀要 (人文・社会科学)』第41巻、pp.87～103
- 11 塚本嘉寿 『漱石、もう一つの宇宙—病跡学的アプローチ』新曜社、1994
- 12 高橋正雄 『漱石文学が物語るもの—神経衰弱者への畏敬と癒し』みすず書房、2009
- 13 松岡努 (2012) 「「未知なるもの」についての臨床心理学的考察—夏目漱石『夢十夜』「第四夜」考—」 pp.109～119
- 14 福島章 「漱石の病跡」『講座夏目漱石』第一巻、有斐閣、1981
- 15 萩原朔太郎 (1941) 「小泉八雲の家庭生活」『ちくま日本文学全集』18 (1991) (『日本女性』九・十月号に所載された)。
- 16 牧野陽子 (2011) 「海界の風景 : ハーンとチェンバレン それぞれの浦島伝説 (一)」『成城大学経済研究』(191)、pp.116～138
- 17 牧野陽子 (2002) 「民話を語る < 母 > : ラフカディオ・ハーン『ユーマ』について」成城大学経済研究、(156)、pp.279～308
- 18 『ユーマ (Youma, the Story of a West-Indian Slave, 1890)』はハーンフランス領西インド諸島

マルティニーク島で執筆しはじめ、ニューヨークで脱稿した長編小説である。

## 参考文献

1. Lafcadio Hearn, THE WRITINGS OF LAFCADIO HEARN, IN SIXTEEN VOLUMES, volumes II, Boston and New York Houghton Mifflin Company, 1922  
v. 2. Stray leaves from strange literature ; and, Fantastic and other fancies and other fancies, 1923
2. ラフカディオ・ハーン著 銭本健二・小泉凡編、斎藤正二・藤本周一・山下宏一等共訳『ラフカディオ・ハーン著作集』全15巻、恒文社、1980-1988  
第4巻：篠田一士他訳『西洋落穂集』1987  
第15巻：斎藤正二他訳『書簡Ⅱ・Ⅲ；拾遺；年譜』1988
3. 小泉八雲著、平井呈一訳『飛花落葉集 他』恒文社1976
4. 夏目金之助著『定本漱石全集』岩波書店、2016-2019  
第12巻『小品』2017  
第14巻『文学論』2017
5. 夏目鏡子述、松岡譲筆録『漱石の思ひ出』岩波書店、2016
6. 北垣隆一著『改稿漱石の精神分析』北沢書店、1968
7. 塚本嘉壽著『漱石、もう一つの宇宙：病跡学的アプローチ』新曜社、1994
8. 高橋正雄著『漱石文学が物語るもの：神経衰弱者への畏敬と癒し』みすず書房、2009
9. 平川祐弘監修『小泉八雲事典』恒文社、2000
10. 『漱石作品論集成』桜楓社、  
別巻：堀部功夫、村田好哉編『漱石関係記事及び文献』1991  
第4巻：鳥井正晴、藤井淑禎編『漾虚集・夢十夜』1991
11. ベンチョン・ユエ著、今村楯夫・中里寿明・池田雅之訳『神々の猿—ラフカディオ・ハーンの芸術と思想』恒文社、1992
12. 平川祐弘・牧野陽子編『ハーンの文学世界』新曜社、2009
13. 島根大学附属図書館ハーン図書出版編集委員会編『ニューオーリンズとラフカディオ・ハーン：「死者たちの町」が生む文化混淆の想像力』今井出版、2011
14. 平川祐弘・牧野陽子編『講座小泉八雲』新曜社、2009
15. 高橋正雄著『漱石文学が物語るもの：神経衰弱者への畏敬と癒し』みすず書房、2009
16. 岸元次子著『漱石の表現 その技巧が読者に幻惑を生む』和泉書院、2014
17. 坂元昌樹・福澤清・西楨偉編著『ハーンのまなざし—文体・受容・共鳴』熊本出版文化会館、2012
18. 坂元昌樹・西楨偉・福澤清・田中雄次編著『漱石文学の水脈』思文閣、2010
19. 坂元昌樹・西楨偉・福澤清編著『越境する漱石文学』思文閣出版、2011
20. 熊本大学小泉八雲研究会編集(1993)『ラフカディオ・ハーン再考—百年後の熊本から』恒文社
21. ラフカディオ・ハーン著、平井呈一訳『心—日本の内面生活の暗示と影響』岩波書店、1977

22. 野網摩利子著『夏目漱石の時間の創出』東京大学出版会、2012
23. 坂本浩著『夏目漱石：作品の深層世界』明治書院、1979
24. 仲秀和著『漱石：『夢十夜』以後』和泉書院、2001
25. 原田広美著『漱石の＜夢とトラウマ＞—母に愛された家なき子』新曜社、2018
26. 関谷由美子著『〈磁場〉の漱石—時計はいつも狂っている』翰林書房、2013
27. 山崎光夫著『胃弱・癩癩・夏目漱石：持病で読み解く文士の生涯』講談社、2018
28. 松岡努（2012）「「未知なるもの」についての臨床心理学的考察—夏目漱石『夢十夜』「第四夜」考—」駒沢女子大学研究紀要第19号、pp.109～119
29. 遠藤みどり（1997）「Lafcadio Hearn の病蹟」『島根医科大学紀要』20、pp.17～21

## A Comparative Study of the Fantastics of the Images of Mother in Lafcadio Hearn and Natsume Soseki's Fantasy Literature: the Reconstruction of Memories

QIN, Yuwei

### Abstract

This study is aimed at investigating the images and the memories of mother in the fantastics of Lafcadio Hearn and Natsume Soseki. As is well known, there are many similarities of life experiences, especially childhood experience between Hearn and Soseki. The descriptions of mother in the fantastics of the two writers also show many common features. These commonalities show the influences from childhood experiences to the images of mother in the literature of Hearn and Soseki. To clarify how experiences in childhood shape the images of mother in Hearn and Soseki's writings, this study analysis the relationship between the images of mother and the structure of the time in the article basing on the method of pathology.

By elucidating why and how Hearn and Soseki deforms the real memorize of mother, this study would emphasize the importance of mothers' images in the typical image of women in the literature of Hearn and Soseki. Results of this study shows that it would be deeply related to the anxiety and the interest in mysterious.